

教える伝える

こどものころ

太平洋戦争が激しくなり、わが家は京の織維問屋の室町辺りから、平野神社近くの別宅に引っ越しました。今では閑静な住宅街も、当時は、畑の広がる田舎で、両親は、ここなら空襲を避けられ、食べ物も手に入ることを考えたのです。ところがひもじきは増すばかりでした。うちは宿家なので、お金で食べ物を買うしかない。ところが、農家も自分の所で精いっぱい。簡単に食べ物を売ってくれなかつたのです。

それで少しほましかと、戦争末期小学校2年生のころに、一人の姉と畠倉の農家に疎開しました。そこには、二戸通りがいのエピソードは、そのことを「実習」として学んだ今も忘れない思い出です。

時代物のマネキンでしょう。マネキン事業は和装で始まったわが社の大きな柱に成長しました(京都市中京区・吉忠本社)



きみへの
メッセージ

利他の心でよく学びよく遊べ

何より、よく学びよく遊べです。学校の勉強だけではなくて、勉強のほかにも周りにいろいろ学べるものがあります。趣味や友だちをたくさん持つて、好きなことを一生懸命やる。そして、利他の心で、人の痛みがわかる、人の嫌がることをしない人間になってほしいですね。

一回は5月20日に掲載予定です



両親、姉一人と私(前列中央)。父方の祖母、母方の祖父母もそろって珍しい一枚です(吉忠社長さん提供)

離見の見

大切なことば

消費者目線で自分を見る

呉服問屋として明治8(1875)年に創業した吉忠の店は、四条室町にあり、そのはす向かいが能楽五流でただ一つ京都に本拠置く金剛流の旧能樂堂でした。そのこともあり、父の忠は、6歳の時から今のお家のおじいさんに稽古を付けてもらい、プロ以上の実力になりました。大学生になつたころ、そんな父に能樂を大成した世阿弥が、その著作「花鏡」に表した言葉。離見は自分が舞い姿を見る観客の視点。それを感じることで、自分の舞い姿が見えるとするという教えです。

この言葉は、そのまま仕事や人生にも当てはまると思います。和装で始まったわが社も、洋装へと移り、さらにそこからマネキンやディスプレイ分野へと事業を展開してきました。その根底には、世阿弥の言葉を大切に、時代の変化、消費者の反応を鏡として、常に自分の姿を客観的に見るという考えが流れています。

今週のせんせい

吉忠社長

きみへ

戦時下、ものの大切さを知つた

よしだ・ただづぐ 1938年、京都市生まれ。60年、同志社大学経済学部卒業。吉忠入社後休職し、米国カリフォルニア大学サンフランシスコステートユニバーシティ大学院に留学。帰国後、65年、復職。87年から社長。京都経済同友会代表幹事(99~2003年)、13年から京都産業会館理事長を務めるなど公職多数。

聞き手・
辻恒人

